哲學餘滴

（世界觀人生觀と哲學）

望月舜勝

哲學とは何か。哲學とは世界に於ける人間の地位、世界と人間との關係を明かにして、人間は如何にして世界に對して處して行くべきかを指導する學問であるといふことが出來やうか。かく世界と人生に關する考へ方觀方の學問であるとすれば哲學は世界觀及び人生觀の學といふことが出來るであらう。世界といふことは又宇宙と云つてもよい。宇とは四方上下又は天地四方空間である。宙とは古往今來即ち往ける古から現在未來を意味する。故に宇宙とは空間及び時間中に含まれる一切のものゝ義である。從つて世界とは物質的なものゝみならず精神的なものをも含めてありとあらゆるもの、存在するもの全体、全存在の義である。その中に人生をも含むのであるから哲學は一言で云へば世界觀の學と云つてよい。しかし人生は我々自身の生として我々の最も關心する所であるから人生觀の言葉の中に世界觀を含めて使用する場合も多い。

さて世界觀と云へば何も哲學にのみ限つたわけのものではない。我々は既に常識のうちにこれを持つて居り、神話のうちにも世界觀が說かれ、又藝術家は各々觀るところに從つて各種各樣の作品を創作して種々の世界觀人生觀を表現してゐる。これ等を哲學的世界觀に對して常識的世界觀、神話的世界觀、藝術的世界觀といふことが出來やう。

先づ常識的世界觀を見るに、その最も幼稚なるものは原始人や未開民族や兒童の如く時代民族個人に於て文化の發達の程度の極めて低いものにあつては我々を圍繞する日月星辰國土山川風雨雷電の如き天變地異四季の交替等自然現象のみならず人類の起源盛衰、個人の生活や運命をば人間に似た形態と精神とを持ち生命と喜怒哀樂の情を有する神々とか鬼神とか魔とかの如き超人間的のもの、時には人間以下の動物の意志的活動と解する。これを擬人觀といふ。例へば植物にはその成長を司る神があり、草木の花開き實を結ぶは神靈の威力に依るものと考へる。風雨雷電等にそれ〴〵の鬼神が宿ると考へられる。殊に星には鬼神が宿つて居りそれが人間を左右するものと信ぜられる。我々が病氣にかゝるのは病魔の仕業であり、吉凶禍福は神明の加護祟りとして禮拜供犧をなし、或は祈禱師巫女の力をかりて祓ひをするのである。人間が惡事を爲すのは天魔に魅入られたといふのはこれは不可思議の運命に支配されてゐると考へるからである。かゝる神話や傳說は必ずしも昔の幼稚な時代や未開民族や兒童に限られたものではない。文化の進步した社會に於いてもかゝる思想に如何に捕れてゐるかは思ひ半にすぎぬものがあらう。今日相當科學的教養がある人でも鬼門を怖れ、旅行轉居に吉日方位を卜つたり、或は姓名判斷に依り名を替へたりする人もある位で容易に拔け難い力で人心を支配してゐるのを見うける。この樣な神話傳說は社會的衆合精神の產物であるとして誰が作つたともなく群衆の間に自然的に發生したものであらうが、元來各種の現象を個々別々の神がなせる所業として解釋說明したのであるから孤立的斷片的であり、それが積り積つてその數を增してもその間に連絡統一なく互に矛盾撞着する所あるを免れない。それが時代を經ると詩人の豐富な詩的想像力によつて彫琢された組織的神話となるのである。前者を低級神話斷片的神話と言へば後者を高級神話組織神話と言つてよい。かゝる神話を有するのは、我が國を始め印度ギリシヤ、ローマ、北歐ゲルマンの如きもので、何れも諸神の結婚出產に依る系圖即ち神統記に依つて天地開闢宇宙

の生成を說明し、國土や山川の起源、民族や國家の由來運命と人生について或る統一的解釋を與へたもので、特に神話的世界觀人生觀と云へやう。かゝる神話は詩人に依つて作られ、民間に信ぜられ、多かれ少かれ其々の民族國家の歷史と結びついて數千年來育まれ來つた思想として民族國民的信仰となつて、意識的にも無意識的にも國民の民族精神に根强く支配してゐる。神話的世界觀は想像空想の產物として學問的理智的のものではないが、我々はこゝに世界と人生について、或る統一的解釋說明を求めんとする哲學的精神の萌芽を認めることが出來るのである。云はゞ哲學の原始形態であり原哲學とも稱すべきものである。神話の哲學的意義と價値については十八世紀以來現今に亘り深い研究理解が試みられてゐる。

次に常識的世界觀人生觀としては何れの民族社會にも、俚諺とか格言金言として人口に膾炙しつゝ我々の日常生活行動を制してゐるものがある。「兎角浮き世は色と酒」とか、「とかく憂き世は金だ」「地獄の沙汰も金次第」といふが如き卑俗低調な諺も、兎に角人生を一つの觀方に統一したものとしてやはり一つの世界觀人生觀といふことが出來やう。俚諺や格言は民族の間に自然に發生したものばかりでなく經典から出たものもあり、或は學者有德者が作つて世人の敎訓としたものもあるが、兎に角それ等が良い民衆の間に普及したことを見ると常識的世界觀人生觀又は民衆哲學と名付けてもよからう。そこでショウペンハウエルは宗敎を民族の形而上學と名付け俚諺を民族の叡智と呼んでゐる。常識と云つても各人の敎養如何に依り常識にも種々の程度があるから、種々の科學思想や生活体驗なども常識中に織り込まれてその世界觀人生觀の內容をなしてゐることもあるが、しかしこれ等の內にも充分の聯絡統一がないといふことが常識の常識たる所似である。常識的世界觀人生觀も日常生活の要求を滿たすに足るのみならず却て根强く世道人心を支配してゐることは周知の事實であるが、然しながら神話や傳說は想像に基ける物語りで世界や人生の活

現象を神格化して解釋せる擬人觀的世界觀であり、未だ合理的に世界全体に關する解釋說明を與へたものではない。從つて或る民族或る國民の由來や運命を說き得て剴切なものがあらうが、他の民族には妥當しない。俚諺や格言の中には世態人情を穿ち得て頗る適切なものがあるが、その多くは一面か半面の眞理を道破したものにすぎない。從つて互に反對矛盾するものもあり未だ全面的眞理を捕えたものと云ひ難い。「蒔かぬ種は生えぬ」と「果報は寢て待て」、「渡る世間に鬼はない」と「人を見たら泥棒と思へ」とは互に相矛盾する格言の好い例である。故に常識を以つて處世の指導原理とせば必ず矛盾撞着は免れない。常識も知識ではある。知識の一種には相違ないがそれは直接に生活の實際と合一せる知識であることを特徴とする。從つて正常健全である常識であれば日常の行動實踐を指導して誤りないが、一度紛糾葛藤に出遭ふと常識の與ふる規準が動搖し混亂に陷り多岐矛盾の間に彷徨せざるを得なくなる。喩へば平重盛が忠孝兩願の岐路に遭ひ死を乞ひ、又青年の自殺は哲學に凝つてと報道せらるゝが、これ未だ哲學に到達しなかつたために常識が行詰つて自殺せる結果に外ならない。そこに常識能力の限界があるのである。

常識のかゝる見解を超え打開するために、或は宗教に入信し、或は藝術に逃避するものもある。宗教の談は暫く措き、明治の文豪夏目漱石の「草枕」の主人公の山道を登りながら考へたことは「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意志を通せば窮屈だ。兎角人の世は住みにくい。住みにくさが高ずると住みやすい所へ引き越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて繪が出來る。(中略)越すことのならぬ世がすみにくければ、住みにくい所をどれほどかくつろげて束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來こゝに畫家といふ使命が下る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし人の心を豊かにするが故に尊い。住みにくい世から、すみにくき煩ひを引き拔いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である畫である。或は音樂と彫刻であ

る。（中略）たゞ己が住む世をかく觀じ得て（中略）かく人生を觀じ得るの点に於て、かく煩惱を解脫するの点に於て、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である」。

「草枕」は漱石自身の言つてゐる如く作者の人生觀藝術觀の一局部を表した小說であつて、未だ作者の人生觀全部を言ひ表したものではない。所謂非人情の世界、ローマンティークの世界の全面的眞理を捕えたものとは云ひ難いが、それが一種の藝術的世界觀人生觀であることは漱石の言を俟つまでもない。

斯樣に現實の世界を逃れ、藝術の世界に逃れんとするのは藝術的世界觀といふのであるが、宗教的信仰なく、藝術的直觀のない人、或はそれ等に滿足しない人々は常識の行詰りを打開するものとして、即ち矛盾の解決を哲學に求めるのである。殊に現代の如く社會のあらゆる領域の文化現象が轉換期にあり危機に立つてゐるときに當つては、あらゆる文化の基礎たる世界觀人生觀を學的に建設するものとしての哲學に對する要求が熾烈となるは當然である。しかしこの哲學的要求は非常特別の場合にのみ限られるのではない。常識が平常何等疑ひないものとして承認するものに對しても矛盾疑念をもち、進んでその基礎に反省思索を向けるに及び、今まで見馴れ聞き馴れて當然のことゝして豪も怪まなかつた日常普通の事々物々について驚きの眼を見張る樣になる。これが哲學の始めである。プラトンが驚異は哲學者の情念（パトス）であると云ひ、アリストテレスは人は昔も今も驚異に依つて哲學することを始めたと云ひ、又デカートは疑惑は哲學の出發であるとした。

かくて我々は世界と人生について反省し思索し此について何等か統一的解釋見解を得ることを希求するに至るのである。かゝる世界觀人生觀に對する要求は人間精神の止み難き要求である。

以上述べた樣に常識的世界觀人生觀は孤立的斷片的で、その間に充分な聯絡統一なく總てが相對的であるが故に矛

盾に陷り混亂を惹起する。この常識を否定することに依り救ふものとしての絶對的な叡智として哲學が要求せられるのである。哲學の發生には常識の承認する所は凡て動搖震撼せられ、何等の據り所なき大疑に逢着せられることが必要である。その結果一切價値の轉到が行はれ、新しき價値が創造され、常識の相對的基準に代り絶對的基準を確得せしむべき叡智としての哲學が建設せられるに至る。それ故に哲學は單に常識の建設延長として發生するものではない。必ず常識が一度行き詰り否定せられることが哲學の發生に對する機緣となる。これ哲學が常識から尊敬せられると同時に危險視せられ、哲學が常人から狂人扱ひを受ける所以である。併しながら哲學は又決して單に常識を否定し去るものにあらず。然し斯くの如く常識を否定することが尊敬せられると共に危險視せられ世の常の人から狂人扱ひを受ける所以である。歷史上有名なのはソクラテスである。「然しながら哲學は又單に常識を否定し殺すものではなく、同時に此を活かすものでなくてはならぬ。哲學はまた異つた立場から常識を肯定するのである。哲學は常識を殺すことに於てこれを活かし、常識は哲學に於て死すると共に生きるのである。一度價値が轉到せられた世界は新たな風光面目を帶びて再び元の形態を表すのである。所謂、到得還來無別事、盧山畑雨浙江潮である。或は盡日尋春不得春、春在枝頭云云と。平常心是道と云ふ如く危機難局に處して誤らざるものは平常の心であり、然れば非常も非常に非ず却て平常にすぎざることゝなり、平常心は平常にして平常にあらず平常以上のものである。常識が哲學に期待する所はかゝる境地に外ならない。是を危險視つゝも異敬する所以である。常識は自己の中に存する矛盾に動搖せしめられ、自己を越えることは出來ないのである。即ち常識は自己の限界を自覺する故に是を危險視しながら哲學に賴らんとする。是哲學が世に白眼視せられながら尊敬を受ける理由である。かゝる關係から見られた哲學は全く實際的な叡智でなければならぬ」「如何なる人生の轉變に會しても誤るところなく、常識が昏迷に陷るかの如き危機難局に臨んでも猶

道なきに道を見る程の能力ある智慧にして始めて哲學であると云はれる。哲學はあくまで實際を離れず人生の生活から出て來た智慧であると同時に實踐を指導する智慧でなければならぬ。實生活に役立たぬ知識は哲學とは云はれぬ。哲學が單なる物識りと區別せられる所以である」（「　」田邊元博士著「哲學と科學との間」五頁及び六頁に依る）

上述の如く哲學は世界觀人生觀として實踐を指導するものでなければならぬ。然し又哲學は單なる世界觀人生觀たるに止らず學的世界觀人生觀でなければならぬ。一言に云へば哲學は世界觀の學でなければならぬ。東洋思想に於ける哲學の意味は前者を主とするものであるが、西洋に於ける哲學の概念は後者を意味すると云へやう。前者を生活の哲學とすれば後者を學的哲學と云へやう。此の兩面即ち哲學は世界人生を對象とする世界觀人生觀であると云ふことゝ、哲學は學であり理論であるといふことゝは哲學を規定する特徴である。哲學と生活とが相即統一せられ生活としての哲學即ち實踐を指導する智慧として、哲學は常識と宗教と相通ずる所があるのである。然し學及び理論たる点に於て常識や宗教と相違する。學問たる点に於ては諸科學と性質を同じうするのであるが、世界人生といふ風に全体を對象とするか、部分を對象とするかに依つて哲學と科學とは異るといはねばならぬ。

— 昭和十四年十月 —